ユートピアの諸相とホフマンのメールヒェン

小﨑　肇

0.　序

ユートピアという言葉の日本における氾濫について巖谷國士は皮肉交じりに伝え，この言葉が特殊な意味をもって使われているという。すなわち，ユートピアとは理想郷であり，「いいところ」という意味で使われているらしい。[1]

この例に限らず，ユートピアという単語は広範な意味をもっている。日本で「ユートピア論が盛んになったきっかけは，学生たちの反体制運動･文化的反乱であり，文学や芸術面における幻想・怪奇・奇想の価値の再発見」[2]といわれる。1970 年代を中心としたこの時代，日本の高度成長を背景にした未来志向が理想郷としてのユートピアへの関心を引きおこした。その一方で，当時まだ勢力をたもっていた旧ソヴィエトを盟主とした共産圏の理想の原型はユートピア的思想にあったにもかかわらず，ユートピアそのものはマルクス主義政権下においては空想的として批判の対象だった。

このような語義の混乱を整理し，ユートピアの原型へと遡ると，1800 年前後に隆盛をむかえたドイツ・ロマン派に強い影響を与えた源泉との一致にたどりつく。本稿では，ユートピアとドイツ・ロマン派という二つの地点へと続いていく思想的な流れを整理し，そこからロマン派の詩人たちが完成させようとした理想的空間をどのように読み解くことができるかをさぐる。とりわけ E. T. A. ホフマンのメールヒェンにおいて，理想的空間とユートピアとがどのような相違，あるいは類似を示すのか比較検討していく。

1.　〈ユートピア〉

トマス・モアの発表した『ユートピア』(Utopia)[3](1516)は，執筆当時のイングランドに

---

[1] 巖谷國士：ユートピアとは何か［巖谷『シュルレアリスムとは何か』(筑摩書房)，2002，181～279 頁］185～190 頁参照。

[2] 川端香男里：ユートピアの幻想（講談社）1993，3 頁。

[3] 実際の書名は『社会の最善政体について，そしてユートピア新島についての楽しさに劣らず有益な黄金の小著』(„De optimo repvbilcae statv deqve noua insula Vtopia libellus uere aureus nec minus salutaris quam festiuus“)である。トマス・モア（沢田昭夫　訳）：

おける社会問題を批判的にとりあげ，そのアンチテーゼとして，大西洋の対岸アメリカにあるという一つの国家と，その国を形づくる法制度，価値観を一人の探検家の報告という形式で発表した作品である。その後，彼が著作のなかでとりあげた，新世界の未知なる島「ユートピア」は，理想的な国家・社会像を提示する論考や文学作品の代名詞となった。さらには，実際に社会をより良いものへと革新しようとする運動にとっての根源的なモデルとして，歴史的にもきわめて重要な概念のひとつとされている。

しかし，理想的な国家・社会像はなにも『ユートピア』において初めて形を成したわけではない。理想郷と呼ばれるようなものは，人類の文化とほぼ時を同じくして生みだされ，神話や宗教的説話，伝説などの文学形式によって語りつがれてきた。その例は枚挙にいとまがない。この，いわゆる理想郷と呼ばれるもののなかでユートピアは特異な意味をもち，独自のカテゴリーを形成した。

それではユートピアとは何か。文学事典によれば，「時間的，空間的に現実離れした場所(たとえば「どこでもない」という名前の国)の，しばしば架空の旅行報告の形式による理想的な社会，あるいは国家体制の叙述」[4]である。ここではさらに，川端香男里の『ユートピアの幻想』の定義に沿って，より細かくユートピアの特徴を概観してみたい。

モアは，ギリシア語の否定語 ου と「場所」を示す語 τοπος を組みあわせることで「ユートピア」という単語を作りだした。ユートピアという言葉が定着した理由は，この卓抜した命名の仕方によるところが大きいように思われる。想像力を刺激するこの名前を冠することでユートピア島は，まるで実在するかのようにリアリティをもつ一方，〈どこにもない場所〉というもう一つの意味によってリアリティのなかにある既存の意味や価値観を逆転させてみせる。そこで「もともと両面価値的(アンビヴァレント)なこの世界の公的な一面が，これのみが真実であるとして表面に出ている虚偽が，あばかれることになる」[5]のである。このような両義的な含意によってユートピアは，いわゆる現実への疑いを生じさせるものとなり，さらに現実への批判として機能するようになる。

この批判的機能を踏まえ川端は，ユートピアの種類を段階的に三つの種類に区分してそれぞれをユートピアと呼んでいる。川端は，ここでは形式的なカテゴリーにはこだわらない。すなわち，「(一) まず全体的な幸福を保証する理想の社会（したがってそれが提唱される時代環境のなかでは，まだ一般的に不可能であると考えられている)，それゆえ最善の社会，もっとも望ましい社会の建設の計画案」をまず挙げている。これが概念的な基礎となっており，これに沿ってどのように表現し，形をなすかという方法が残りの二つである。つまり，「(二) このような案を展開する論文あるいは対話形式の哲学的・政治的作品」も

ユートピア（中央公論社）1984，（第 4 版）3 頁。

[4] Der Literatur-Brockhaus in 8 Bänden. Hrsg. v. W. Habicht, Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich (BI-Taschenbuch), Bd. 8., 1995, S.190.

[5] ユートピアの幻想，25 頁。

またユートピアとしての特徴を有しており，これが「(三) ユートピア的プログラムを芸術的な形で，効果的に人にアピールする形でフィクションとして提示したものが文学的ユートピアと呼ばれるもの」へと技巧的に昇華されている場合もある。ここでユートピアに必要となるのは「組織された社会，社会的・政治的土台・構造の計画的な完全性などの要素，同時代の現実にそのような秩序が実際には欠如していること等の要件」である。[6]

この論文では，これらの川端の説明を踏襲し，以上の三種類に当てはまるものを〈ユートピア〉と呼ぶことにしたい。

2. プラトンからゲーテまで

モアによって定着した「ユートピア」という言葉ではあるが，前述したように，その特徴をもった論考や文章はモアの執筆以前からすでにあり，またモア以降，〈ユートピア〉は脈々と現代まで案出され書き続けられている。その中でも，とりわけ『ユートピア』で言及されているプラトンと彼の国家観をつづった一連の作品は，言葉による思考実験をとおして理想的なよき国家についての対話で構成されており，〈ユートピア〉の原型というべきものとなっている。

その名も『国家』と呼ばれるプラトンの対話編では，彼の師であるソクラテスを主要な話者として，正義と善についての議論を経由し，その正義や善が体現される理想的な国家の姿が紡ぎだされる。ソクラテスたちによって構想される国家は，当時のギリシアにおいて標準的な都市国家の枠を超えるようなものではない。「最も必要なものだけの国家」[7]と称されるその構想では，国民の数も最低限におさえられ，そのなかに必要最低限の職業人たちが生活している。この社会構造に特徴的なのは，国民を束ねる統治階級の存在である。一般に哲人政治と呼ばれるその形態は，一部のすぐれた哲学者たちによって構成され，私有財産を認められていないグループが，社会とは隔絶された状態で国家運営に従事する。このグループを頂点に，内政，外交を含めて正義と善をつらぬいた国家の体を成すのである。

ソクラテスたちによって構想された理想国家は，プラトンの他の対話篇では別の形で登場する。『ティマイオス』の冒頭でソクラテスたちは，『国家』において検討した理想の国家像についてふたたび言及する。その会話においてクリティアスは，かつて「七賢人の中でも第一人者のソロン」[8]から自分の祖父に語りつがれたという神話時代のアテナイが，まさにこの理想国と合致するのであると述べる。クリティアスはこのエピソードを「全面的

---

[6] 同上，48～49 頁。
[7] プラトン（藤沢令夫　訳）：国家(上)（岩波書店）1993（第 34 刷），7 頁。
[8] プラトン（種山恭子　訳）：ティマイオス　［『プラトン全集 12』（岩波書店）1975 年 1～178 頁］12 頁。

に真実の話」[9]と強調するが，もちろん神が人々とともに生活していたころの神話，あるいは伝説というべきものである。そしてこの伝説中，アテナイへと侵略してくる国こそ〈ユートピア〉のもう一つのモデルといわれる大西洋に浮かぶ島アトランティスである。

クリティアスによれば，アトランティスには神の子孫たちを王族とする国家があり，当時ギリシアの地にあった理想国家アテナイへと侵略を始めた。この戦いは，アテナイ側にとって圧倒的に不利なものだったが，周辺の国々をまとめ，すぐれた戦士たちの活躍によってアテナイはアトランティスを撃退する。その後，「大地震と大洪水」[10]によって理想国家アテナイは多くの大地を失い，アトランティスは完全に水没したのだという。

本来は『ティマイオス』から続く三部作をとおしてプラトンは理想国家アテナイの業績を描こうとしたといわれる。しかし，その構想は未完に終わり，『クリティアス』のなかで伝えられたアトランティスは，断片的な国家像のみ語りつがれることになった。大西洋に浮かぶ島に建設されたその国は，緻密な都市計画と幾何学的，シンメトリカルな輪郭，そして壮大かつ壮麗で，謎の金属によって飾りつけられた建造物をとおして，完成された姿を誇っていたらしい。沢田昭夫は，『ティマイオス』でアトランティスが「不思議な，不条理な」(ατοπον，原型は ατοπος（アートポス）)と形容されていることに注目し，「ユートピア」の語源のひとつではないかと推測している。[11]この「不思議，不条理な」都市像が，しばしばアトランティスを扱った書籍，研究などにその見取り図とともにしばしば載せられている[12]のは，アトランティスがユートピアの原型として受け入れられている要因のひとつにも思える。人知を超えた高度な技術は，現実にそれが欠如しているゆえに，強烈なコントラストによってすぐれた理想郷として人の目に映る。住民の生活についてはほとんど叙述されてはいないものの，その素晴らしい都市の姿をとおして，アトランティスが理想的な社会のひとつとして認識されたのではないか。

モアの『ユートピア』は，プラトンの『国家』における理想国の姿と，アトランティス的な高度にととのえられた国家像を継承しているように思える。この作品では，アメリゴ・ヴェスプッチとともに大西洋をわたったラファエル・ヒュトロダエウスから著者モアが聞きとったという形式で，ユートピア島に存在する理想的な国についての報告がまとめられている。この報告には，ヒュトロダエウスがイングランドの枢機卿のもとで体験した逸話という形式で，イングランドの支配階級の無能さを非難し，それとの対照においてユートピア国の理想的形態について話が進むという構成となる。ただし，モア自身は，ユートピア国のすべてを肯定的に受け入れているわけではない。「あの民族の生活習慣，法律のなかでずいぶん不条理にできているように思われた少なからぬ事例がわたしの心に浮かんでき

---

[9] 同上
[10] 同上，23 頁。
[11] ユートピア，234～235 頁参照。
[12] たとえば，『プラトン全集 12』302～305 頁，『ユートピアの幻想』57 頁などを参照。

た」[13]という言葉は，ユートピア国について批判的な態度をモアが保っていることを示しており，留意しておかなければならない。

政治形態や生活習慣，文化など広範にわたる分野が網羅されているその報告で，まず話題となるのはユートピア国がどこにあるのか，どのような都市形態なのか，という地理的・形態的情報である。その地理的叙述のなかでまず目を引くのが，ユートピアが島となった出来事である。かつてその地を統一した王は，他国の影響や干渉を嫌い，もともと大陸の一部であったユートピアの地を巨大な運河によって切りはなした。これによりユートピアは他にはない独特の国家運営を進めることができたのである。この作品の中心には当時のイングランド社会への批判と同時に，よりよい社会を模索するモアの意図を反映して，当時考えられる，国家を形づくるための要素が広く取り上げられている。しかし同時に，作品中のユートピア国を〈どこにもない場所〉として，理想的かつ完全なる国という神格化を実現しているのが王によるこの大規模な土木事業なのである。当時のイングランドに匹敵する大きさの島を大陸から切り離すという大規模な運河建設は，現実離れした一面を持ち合わせつつも，ユートピア国の文明が高度に発展していることを感じさせる。さらに「道路は交通のためにも風よけのためにも便利に敷かれ，建物は決してみすぼらしくはなく，通りに面して長い一列にならんだ家並みは，向かい側の家々の玄関から一望できます」[14]という描写が，ユートピア国の壮大さと秩序だった美を際立たせている。社会秩序としては，共有財産制や平等主義的に見られるように『国家』の理想国との類似点がある一方で，土木事業によって島となるという伝説的な出来事は，アトランティスの壮大な理想国家の一面を受け継いでいるといえるのではないか。

川端は，それ以前のユートピア作品と比較したモアの特徴を四つあげている。それは，文学的描写，資本主義への反発，より良き社会，たんに政治的ではなく社会総体の記述，[15]である。そしてこれ以降のユートピア作品はモアの影響を受け継いでいく。それと並行してヨーロッパは近代化へと舵を切り，工業化と資本主義による収奪やアンシャンレジームのような旧態の不合理が明るみなっていく。また，急激な変化そのものが社会の変革や改良も実現可能ではないかという自信へとつながっていく，と川端は述べている。さらに，啓蒙主義の時代が並行して訪れ，個人の能力や内面をいかに優れたものにしていくかが課題となる。また，地理上の世界は完成され，ユートピアは空間的な新天地ではなく，未来を志向するようになるのだという。

このような近世から近代へのヨーロッパの急激な変化は主にイギリス，フランスの両国で見られる現象だが，ユートピア的思想の影響はドイツにもあらわれてくる。近代ドイツに登場したそのひとつの重要な例として，ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時

---

13 ユートピア，211 頁。
14 ユートピア，110 頁。
15 ユートピアの幻想，115 頁。

代』(Wilhelm Meisters Wanderjahre)(1821/1824)（以下，『遍歴時代』と略記）を挙げておきたい。作中のユートピア的構想とは，ヴィルヘルムが息子フェーリクスの教育を依頼する地域，いわゆる「教育州」(die pädagogische Provinz)[16]である。その運営形態に注目すると，前述した特徴と照らし合わせたとき，この「教育州」は厳密には〈ユートピア〉とはいいきれない。この地域には，ヴィルヘルムの所属している秘密結社によって独自に少年たちが集められ，音楽，宗教，農耕をとおして教育が施されている。その点では，プラトンの『国家』で論じられたエリート的理想国と類似してはいるが，総体としての社会ではなく，少年たちを中心とした共同体という方がより正確だろう。

一方で川端によれば,「教育州」の主要な目的である教育こそが，十六世紀ヨーロッパの社会契約説とユートピアを結びつけたという[17]。この意見を参考にすると,「教育州」がユートピアを実現しようとする過程において必要不可欠であると考えられる。実際,『遍歴時代』では，教育を受ける年齢よりも上の社会人世代は職業訓練をうけ，実技的な職能を身につけたうえで新天地アメリカへ向かい，よりよい社会を目指す。ここに出てくるアメリカには，まだ完成していない理想への期待を内に秘めた国が映し出されている。

「教育州」のユートピア的特徴は，地理的，文明度の点で『ユートピア』からの変化がみられる。ドイツ国内と設定される「教育州」では，近世から近代へ進み，工業化が発展した後のため，物質的文明の高度化はもはや理想化されていない。むしろ，牧歌アルカディア的世界観に近づいており，自然とかかわる共同体が描かれている。言いかえれば，現実の文明が壮大なユートピアを凌駕し始めたとも考えられる。

産業革命，近代化を経て，十九世紀をむかえると，それまでとは異なった傾向が文学的ユートピアの社会に現れる。実際の工業化がそれまでの社会構造を作り替え，物質的な豊かさが実現されると，社会改良の意志は徐々に薄れていく。さらに，近代国家による一方的な秩序が社会全体を縛り付けるようになると，文学的ユートピアはアンチ・ユートピアへと移行していく。また，空想的社会主義運動から共産主義革命を経た実地の社会的プロジェクトが失敗したことによりユートピアの夢は別の展望へと進んでいくのである。

3. アトランティスの再発見

前節でゲーテが文学的ユートピアの流れを引きついでいることを確認した。一方，同時代の文学的潮流であるドイツ・ロマン派では，社会変革をもとめる思想は一般的ではなかった。ただ，ロマン派のメールヒェンの奥底にはユートピア思想の変種が隠れている。それはプラトンの影響を強く受けたノヴァーリスに見てとることができる。

---

[16] Johann Wolfgang Goethe: Wilhelm Meisters Wanderjahre. In: Goethes Werke in 14 Bänden, textkritisch durchgesehen v. E. Trunz, Hamburg (Wegener), 1948ff. Bd. 8, S. 265.

[17] ユートピアの幻想，118 頁参照。

ノヴァーリスが，詩作の方法としてメールヒェンを選んだのは，自己と自然との調和的関係から，かつて人間がもっていた完全性を追求するためであった。この作品群の出現に大きな影響をあたえたのが，ドイツ語圏で広まった宗教的な敬虔主義の運動であり，ノヴァーリス自身が親しんだプラトンやヘムステルホイスの思想であった。ここから色濃く出てくるのは黄金時代(goldenes Zeitalter)への憧憬である。[18]

黄金時代とは，その時点での堕落した時代と比較して，はるか以前の純粋かつ完全な人間性があったとされる時代であり，ギリシア時代からキリスト教に至るまで色濃く表れている。川端によれば，ユートピア思想が形づくられる過程で現れる「理想郷の神話」は，世界各地の神話に見られ，〈ユートピア〉の近接領域として残されていった。[19]これらの「理想郷の神話」は定義上，〈ユートピア〉とは性格が異なる。黄金時代は理想的な完全性を特徴とするが，現実の社会に対する影響をほとんどもっていない。またキリスト教においては，この黄金時代の思想に加え，黙示録的なキリストの復活への信仰が千年王国論の待望として現れる。これは，未来志向の〈ユートピア〉と共通する一方，人類の努力とは無関係に，その時がきたならば，必ずその国に到達するという意味で特徴的である。

ノヴァーリスのメールヒェンは黄金時代，あるいはキリスト教的千年王国論の思想を色濃く反映しているが，上述したように彼はプラトンの著作からも多大な影響をうけている。それゆえ，彼の作品にはプラトン由来のユートピア的要素がしばしば顔をのぞかせている。彼の最初のメールヒェンが収められている『サイスの弟子たち』(Die Lehrlinge zu Sais) (1798)の元をたどればプラトンとおなじ原典にたどりつく。シラーの散文詩のひとつを題材としたこの未完の作品は，古代エジプトのイシスの神殿という知の殿堂が舞台である。この都市についてプラトンもまた『ティマイオス』において言及している。すなわち，クリティアスが祖父から聞いたという伝説は，さかのぼって賢者ソロンがエジプトを訪れた際，サイスの神官から伝えられたものなのだ。ここに来て，異なった形式で表出されるメールヒェンと〈ユートピア〉，二つの文学的アプローチが，おなじスタート地点にたどりつくのである。さらにノヴァーリスはプラトンから，〈ユートピア〉の源の一つであるモデルを借用する。長編小説『青い花』に収められているメールヒェンのひとつの舞台が大西洋に沈んだあのアトランティスなのである。

ノヴァーリスのメールヒェンにおいて，アトランティスは決して理想化された都市国家としては描き出されていない。『クリティアス』では，測量的数値を駆使し幾何学的な美しさを誇る都市像について述べられていた。これに対してノヴァーリスのアトランティスでは，このような整然とした都市像について語られることはない。ハンス・シューマッハはこの作品の主題を「自然から疎外された人間としての自己の，陶冶・形成 Bildung，文化，

---

[18] 拙論：ホフマンのメールヒェンにおけるロマン派的モティーフとその変遷［日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』45，2012，47～59 頁］47～48 頁参照。
[19] ユートピアの幻想，40 頁。

詩学の融和である」[20]と解釈している。黄金時代の人間に近づくため，あるいは疎外され本来の人間性を失った人間の問題がクローズアップされており，詩作と自然の調和した生を描き出そうとする。

この主題にあわせるように，ノヴァーリスのアトランティス・メールヒェンでは作中の「首都」がどのような都市なのかについては具体的な言及はほとんどない。「この世のパラダイスの中心」(mitten in diesem irdischen Paradies)[21]と称される姿はここではさほど重みをもたない。むしろ，理想の都市であったアトランティスの宮廷には，そこで生活しているものには気づくことのできない，恐ろしいものが潜んでいる。宮廷に備えられた庭園から森へと抜けだした王女が宮廷に戻ってきたところで，彼女の視点から見た宮廷は次のように描写されている。

> 彼女が宮殿に帰ってみると，その華美なさまやにぎやかな暮らしぶりに驚くばかりでした。しかしそれよりも肝をつぶしそうになったのは，父が出迎えてくれたとき，彼の顔が，生まれて初めて彼女に畏怖の念を涌きおこし，おびえてしまったことでした。[22]

森に隠遁し，首都との交わりのまったくない父子とのふれあいをへて王女が感じるのは，宮廷と父に対して感じる違和感と畏怖であり，それは理想的黄金時代から堕落しはじめた人間の姿をまざまざと映し出すのである。

これに対し，大団円をむかえる最後の舞台となる宮廷の庭園は，まったく異なった描写で始まっている。

> 大気は暖かく晴れわたり，かすかな風が，遠方からやってくる喜ばしい一行が来るのを告げるように，老いた梢の上のほうで音を立てていました。たくさんの篝火のあいだに噴水があり，数えきれない光をきらきらさせながら，音をたてる梢の闇のなかに向かって勢いよく水を噴き上げ，木々のあいだから響いてくるさまざまな歌にあわせて，美しい旋律のようなさらさらという水音をともなわせているのでした。[23]

王の宮廷を去り父子の元に身を寄せた王女が，すぐれた詩人となった青年の子供をさずかり王のまえにふたたび姿をあらわす場面は，このような庭園の様子からはじまる。王との融和を演出するこの場面は，自然から流れる繊細なひびきによって彩られている。「かすかな」(leise)，「さらさら」(Plätschern)といった言葉で飾られる庭園は，プラトンやモア

---

[20] Hans Schumacher: Narziß an der Quelle. Wiesbaden (Athenation), 1977, S. 28.
[21] Novalis: Heinrich von Ofterdingen. In: Schriften, Hrsg. v. P. Kluckhohn. u. R. Samuel, Stuttgart (Kohlhammer), 1960, Bd. 1., S. 214.
[22] Ebd. S. 218.
[23] Ebd. S. 224.

のユートピアにある面影はほとんどない。そこには，物質的な豊かさではなく，自然との調和の完成された空間が広がっている。

ノヴァーリスは，アトランティスを再発見するが，それは機能的都市ではなく，かつての神話時代の素朴な雰囲気をまとっていた。このような描写は,「桃源郷に似たギリシア古代の田園的理想郷アルカディア」[24]を思いおこさせるものである。黄金時代をのぞむノヴァーリスのメールヒェンは，理想としての空間を社会改良ではなく，自然的牧歌との融和へと近づける。ノヴァーリスは自然との調和状態，黄金時代をアトランティスにおいて描こうとした。それは，個々の人間に課された課題であり，日常から隠された真実に詩人として向き合おうとする姿勢であった。それゆえアトランティスは，写実的な理想国家のモデルではなく，心の安らぐ叙情的なシーンを必要としたのである。

4. ホフマンのメールヒェンと〈ユートピア〉との関係

(1) アトランティスの継承

ノヴァーリスの同時代にアトランティスを継承する詩人があらわれる。E. T. A. ホフマンは，ノヴァーリスの好んだ形式である〈メールヒェン〉という副題を添えた作品『黄金の壺』 (Der goldene Topf)(1814)において，写実的に書かれたドレースデンと並行するメールヒェン的空間をアトランティスと命名した。その風景は以下のように語られている。

> 精霊が水面にまなざしをそそぐ。そのとき，水が動きだし，音をたてて泡立つ波へと変わった。そして，その水を呑みこもうと黒い大口を広げた底知れぬ裂け目へと，雷鳴のごとき轟音とともに飛び込んでいった。勝ちほこる勝者のごとく花崗岩の岩塊が，切っ先鋭く王冠を載せたかのような頭を高くかかげ，太陽が母のごとき懐に受けとめ，輝く腕のようにその陽光で抱きかかえてあやし，暖めるまで，その谷間を護っているようだった。[25]

壮大な渓谷に朝日が射しこむ景観は，自然の大いなる力を感じさせるという点ではノヴァーリスの理想郷と共通点をもっている。しかし，ダイナミックなこの空間には，誰一人として人間は登場しない。「不思議の国」(Wunderlande)[26]と呼ばれるこのアトランティスに住んでいるのは，引用にもあらわれている精霊たちと，自然のなかにあふれる草木や動物たちである。われわれの現実においては知性をもたない生物たちは，この一種の枠物語において精霊と意思疎通する知的生命となっている。しばしば「アトランティス・ミュト

---

[24] ユートピアの幻想，41 頁。
[25] E. T. A. Hoffmann: Der goldene Topf. In: Fantasie- und Nachtstücke, hrsg. v. W. Müller-Seidel, Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1978, S. 192.
[26] Ebd. S.228.

ス」(Atlantis-Mythos)[27]と呼ばれるこの物語は，世界を変容させ，普段見えないものを可視化させる知的遊戯としてのファンタジーの産物なのである。

一見するとホフマンのアトランティスは，いわゆる現実から完全に隔絶された空間のようである。たとえばノヴァーリスの場合，『青い花』のアトランティス・メールヒェンは，時間的，空間的な現実とつながっているように思われる。物語は「この国がどこへ消えてしまったか，知る人はだれもいません。ただ言い伝えでは，アトランティスは巨大な洪水によって人々の目から奪い去られてしまったのです」[28]という言葉で締めくくられる。また，登場人物たちは特殊な力をもっているわけではなく，不可思議なできごとや説明のつかない代物は扱われていない。メールヒェンといえど写実的現実を感じさせる。

『黄金の壺』の場合，アトランティスは非現実的である。しかし，作品全体から見ると，アトランティスといわゆる現実との関係は複雑なものとなる。ドレースデンの大学生アンゼルムスはアトランティスから追放された火の精霊に見込まれ，ついにはその不可思議の世界へと転生する。これは，詩的才能に恵まれたアンゼルムスにとっての理想の生活が実現したと解釈することができるだろう。だが，物語の結末は，その理想的な詩的生活とは対照的に，屋根裏部屋で『黄金の壺』という作品を執筆している語り手へとフォーカスが移る。そして語り手は，アンゼルムスのようには容易に詩的世界へと飛翔できないことを嘆くのである。

この語り手が，真の詩人として完成することができるのか，という問題は，さまざまな解釈の余地を残していると同時に，本論のテーマからはそれるためここで詳しくは触れない。しかし，〈ユートピア〉が写実的現実の空間と，〈そこにはない〉という特徴によって現実を批判的に投影する力を持つ一方で，ホフマンのアトランティスは間接的に語り手の住まう現実の厳しさを暗示させるのである。

(2)　間接的〈ユートピア〉

『黄金の壺』のアトランティスは，ユートピアのもつ力を暗示はしたものの，写実的現実に対するその影響力をはっきりと示してはいない。ところが，後に発表されたホフマンのメールヒェンでは，想像力のなかに区分されていた不可思議な世界が，写実的な現実の世界を侵食し始める。『ちびのツァヘス，またの名をツィノーバー』(Klein Zaches genannt Zinnober)(1819)というメールヒェンである。

物語の主な舞台は，実在する都市ドレースデンをもちいた『黄金の壺』とはちがい，架空の大学街ケレペスである。しかし架空とはいえ，そこに登場する人物たちや社会状況は当時のドイツ語圏を彷彿とさせる[29]ものを含んでおり，その空間を写実的現実と考えても

---

[27] Dokumente und Erläuterung Der goldene Topf., Hrsg. v. P.-W. Wührl, Stuttgart (Reclam), 1982, S. 79.
[28] Heinrich von Ofterdingen, S. 229.
[29] 拙論：ホフマンの作品にみる大学生像について［広島独文学会『広島ドイツ文学』27, 2013，31～46 頁］35 頁参照。

問題はないだろう。この小国家ケレペスのかつての領主が「啓蒙」(die Aufklärung)を導入した，というのが，物語の筋に影響をおよぼす一要素である。

その際，啓蒙された国家を対照的に際立たせるものとして，先代デメトーリウス侯爵の時代の描写がある。

> だれもが，デメトーリウス侯爵がこの国を支配していることを知っていた。だが，その間にだれ一人としてその統治に気づきはしなかった。みなはそのことに心地よく満足していた。[30]

小さな村々と点在する城しかなかったこの国では，支配者のいることはだれもが知っていたが，支配者の束縛を感じることなく人々が生活していたことが伝えられる。だれもが満足し，破綻することのない統治は理想的な国家と言えるだろう。しかし，その状況は領主の死とともに終わりを告げる。次代のパフヌティウス侯爵は国家を啓蒙し，近代化を押しすすめた。それにより国土は開発されていき，作中の大学街ケレペスとなるのである。

さらにパフヌティウスは国家の啓蒙に際し，先代の時代に住みついた多くの「妖女」(Fee)[31]たちを追放した。すべてを没収され故郷である「ジニスタン」へと送り返されるのだが，その際彼女たちはまったく嘆きもみせず，歓喜の声をあげてふるさとへと帰っていく。

国家の啓蒙に際して起こったこれらの出来事は，不可思議な世界の流入をあらわす一方で，〈ユートピア〉と同じ機能を発揮する。第一に，デメトーリウス時代が理想的国家像として描かれている点である。前近代的な社会ではあるが，善政が敷かれ，人々が満足して暮らしているその時代は，本論で検討してきたユートピア像と比べても遜色ない。第二に，妖女たちの故郷ジニスタンについて学者たちが報告した見解が，ユートピアの原義を模している点である。追放されたにもかかわらず，喜んで帰還していく妖女たちを見て，パフヌティウス侯爵はみずからおこなった啓蒙を嘲られているのではないかと不安を感じる。その侯爵を安心させるために，地理学者と歴史家がおこなった説明は次のようなものだった。

> 二人の意見は次のように一致した。ジニスタンは憐れな国です。文化，啓蒙，教育，アカシアそして牛痘もなく，そもそも存在すらしていないのです。まったく人間や国家にとって，まったく存在しないなどということよりひどいことに対面することなどでき

---

[30] Hoffmann: Klein Zaches genannt Zinnober. In: Späte Werke, hrsg. v. W. Müller-Seidel, Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1978, S. 15.
[31] Ebd. S. 16.

ましょうか。[32]（強調筆者）

ジニスタンの状況についてくわしく述べた部分は作中にはない。しかし学者たちがここぞとばかりに強調する〈存在しない〉という特徴は，まさしくユートピアの〈どこにもない場所〉という意味と合致している。同時にこの言葉は，学者たちの説明をいささか滑稽なものへと変化させる。妖女たちの帰還する先を調べたにもかかわらず，〈存在しない〉ことを結果としてその国を評価する学者たちは，論理的に説明を試みようとして，むしろ愚かな姿をさらすことになる。啓蒙されたケレペスという社会は，ホフマンの言葉あそびによる二つのユートピアによって二重の批判的力にさらされているのである。

5. まとめ

以上，〈ユートピア〉の特徴についてまとめ，ホフマンのメールヒェンと〈ユートピア〉を比較しつつ，〈ユートピア〉の社会批判の力がホフマンの作品においてどのように表れているのか検討してきた。

〈ユートピア〉をとりわけ文学的に表現する場合，全体的な幸福を保証する社会を効果的に提示することが必要となる。そのような形で提示された〈ユートピア〉は〈どこにもない〉というもう一つの意味によって，現実の価値をうらがえすなどの効果を生み，現実を批判する機能をもつ。

この〈ユートピア〉の原型はプラトンの『国家』で構想された理想国家と，主に『クリティアス』で取り上げられたアトランティス島といわれている。『国家』の理想国家は哲人政治によって統治され，アトランティスは完全な都市像をとおして理想的国家を提示した。この原型からトマス・モアは『ユートピア』で，いわゆる現実の社会を批判的に投影する〈ユートピア〉の機能を生みだした。この〈ユートピア〉の系譜は近代ドイツ語圏にもつながっており，ゲーテの『遍歴時代』では「教育州」という亜種が登場する。

ドイツ・ロマン派ではノヴァーリスが，〈ユートピア〉と同じくプラトンの思想から理想的空間を企図した。しかし，黄金時代の完全なる人間を追求するノヴァーリスの場合，その空間はメールヒェンとして詩作され，批判的力をもつ〈ユートピア〉ではなく，むしろ自然と調和した牧歌的アルカディアへと近づいていく。

同時代人ホフマンもメールヒェン『黄金の壺』においてアトランティスを継承した。ホフマンの場合，このアトランティスは非現実的で不思議な空間として案出されている。そしてこの空間を写実的現実と並列させて作品を構成することで，いわゆる現実に対する〈ユートピア〉的な価値の転化を暗示している。さらに『ちびのツァヘス，またの名をツィノーバー』では，二つのユートピア的要素であるデメトーリウス時代とジニスタンを使って

[32] Ebd. S. 18.

ケレペスの社会に対する批判をおこなっている。この二つの国は，社会について詳細に形づくられてはいないものの，まさに〈どこにもない〉ことによって，〈ユートピア〉と同じような機能を発揮するのである。

ホフマンはそれぞれのメールヒェンにおいて，〈ユートピア〉のもつ機能を操作することで，写実的な現実とメールヒェン的世界との距離を使い分けている。このように使い分けられた距離の間隔がどの程度のものか，その差異を分析すれば，この論文で扱った作品も含めてホフマンのメールヒェンの位置づけについてあらたな可能性を見いだせるのではないだろうか。

Aspekte der Utopie und Hoffmanns Märchen

Hajime OZAKI

In diesem Aufsatz geht es um Einflüsse des Genres der Utopie auf die romantische Literatur, besonders auf Hoffmanns Märchen, weil sie meines Erachtens eine große Rolle für die Interpretation dieser Texte spielt.

‚Utopie' ist „die literarische Darstellung idealer Gesellschaften und Staatsverfassungen eines räumlich und/oder zeitlich entrückten Orts (z. B. das Land ›Nirgendwo‹), oft in Form fiktiver Reiseberichte". Die Beschreibung utopischer Verhältnisse kann implizit oder explizit eine Kritik am falschen Schein einer realen Gesellschaft enthalten.

Die Staatsverfassung in Platos „Politeia" wird allgemein für ein Muster der Utopie gehalten, wo das Land von einer Elite gemeinschaftlich regiert wird. Ein anderes Modell ist Atlantis in Platos Werk „Kritias". Dieses Atlantis wird sowohl als legendäre Insel im atlantischen Ozean wie auch als großartiger, ästhetischer und exotischer Staat beschrieben. Thomas Morus' „Utopia" entwickelt die Elemente beider Utopien weiter. Das utopische Land ist einerseits durch Ordnung und Schlichtheit geprägt, andererseits mit ihrer großartigen Architektur als Insel isoliert. Als neueres Beispiel in Deutschland wird oft die „pädagogische Provinz" in Goethes „Wilhelm Meisters Wanderjahre" genannt. In dieser Provinz werden die jungen Menschen durch Musik und Religion gebildet, so dass hier nicht eine ganze Gesellschaft als Utopie erscheint, sondern eine arkadische Gemeinschaft oder Gruppe. Aber die gebildeten Leute in diesem Roman wollen in Amerika eine neue Gesellschaft gründen. Insofern kann die pädagogische Provinz als Beginn eines utopischen Projekts gelten.

Etwa zur gleichen Zeit entdeckte Novalis, ein romantischer Dichter, Platos Atlantis für

sich. In „Kritias“ besitzt die große Stadt von Atlantis ideale Maßverhältnisse und eine geometrische Ordnung. Aber Novalis zeichnet den alten Staat im „Heinrich von Ofterdingen“ aufgrund seiner Vorstellung vom ‚Goldenen Zeitalters‘ als naturnahes und idyllisches Reich.

E. T. A. Hoffmann übernahm den Namen „Atlantis“ in seinem Märchen „Der goldene Topf“. In diesem naturvollen Raum leben aber keine Menschen, vielmehr wird hier auf mythische Weise von der Liebe unter Naturgeistern und Pflanzen erzählt. Am Ende des Werks erreicht der Student und Dichter Anselmus das mythische Land, während der Erzähler in der realistisch gezeichneten Wirklichkeit sich in seiner Dachstube nach dem utopischen Ziel sehnt. Durch diese Trennung bildet „Atlantis“ einen umso schärferen Kontrast zur realen Welt und kann als Utopie eine kritische Funktion einnehmen.

Dagegen wird in einem anderen Märchen Hoffmanns, „Klein Zaches genannt Zinnober“, eine kritische Utopie dargestellt. Die fiktive Universitätsstadt Kerepes war früher ein naturnahes „Ländchen“. Damals wusste jedermann, „daß Fürst Demetrius das Land beherrsche; niemand merkte indessen das mindeste von der Regierung, und alle waren damit gar wohl zufrieden“. Der Sohn des Fürsten importiert später die „Aufklärung“ und entwickelt das Land, während viele der Feen, die sich zu Demetrius‘ Zeiten angesiedelt haben, in ihre Heimat „Dschinnistan“ zurückkehren. Als die Feen auf dem Weg nach Dschinnistan „eine solche übertriebene Freude äußerten“, hat der Fürstensohn Angst vor ihrem Spott über seine Aufklärungsbemühungen. Deshalb befiehlt er einem Geographen und einem Historiker, über Dschinnistan zu berichten; sie erklären, „daß Dschinnistan ein erbärmliches Land sei, (…) eigentlich auch gar nicht existiere. Schlimmeres könne aber einem Menschen oder einem ganzen Lande wohl nicht begegnen, als gar nicht zu existieren“. Der ganze Verlauf der Handlung legt die Schlussfolgerung nahe, dass sowohl das Reich des Demetrius als auch Dschinnistan von niemandem wahrgenommen worden sind und daher gar nicht existieren, also im wörtlichen Sinn „Utopien“ sind, welche die gesellschaftlichen Verhältnisse der Stadt Kerepes in einem kritischen Licht erscheinen lassen.